

第1回屋内スケート施設あり方検討会議の概要

1 日 時：令和4年7月5日（火）14:00～15:45

2 場 所：山形県自治会館 401 会議室

3 参加者：出席者名簿のとおり

4 議事概要

(1) 会長の選出

構成員の互選により山田浩久氏が会長に選出。

(2) 職務代理者の指名

山田会長が須藤勇司氏を職務代理者に指名。

(3) 事務局説明

事務局より資料に基づき、検討の背景や本県のスケート施設の現状等について説明。

(4) アドバイザー説明

アドバイザーより資料に基づき、スケートリンクの概要や実際に管理を行っている施設の運営実態等について説明。

(5) 意見交換

構成員からの主な御意見等については下記のとおり。

【井上 圭子 氏】

屋内のスケートリンクが、数年前から山形ではなくなり、競技者も、スペシャルオリンピックのアスリート達も非常に困っている状況。

屋外のスケートリンクがあるからと言っても、実際営業しているのは11月の末から2月の中旬までなので、実際3ヶ月間だけ。その3ヶ月間しか練習できない。

加えて、屋外のスケートリンクは400メートルトラックなので、屋内のサブロク（30m×60m）リンクと同じ大きさの場所をとることができない。スペシャルオリンピックのアスリート達にも、音楽を付けて振り付けをしてあげて、競技、大会に出られるように育ててはいるが、それができない状況にある。

そのため、世界大会や、全国大会に今まで出場していたアスリートも、いざ全国大会に行ったときに、知的障害を持っている子ども達は、臨機応変にその場で、アレンジしたり、応用したりということがなかなか難しい。決められたことをやることはできるけれども、場所が変わったから、リンクの大きさが変わったからこう滑りましょうと言っても、なかなかできないのが現状。

今、全国大会も、コロナでここ数年はできていないが、大会の時にも、なかなか実力が発揮できない、イコール、世界大会に進めない。

それだけの能力を持って、知的障害の子たちがまずスポーツで表に出るということ自体アスリートも家族もすごく勇気がいることだが、その実力が発揮できないという状況

に今あるので、ぜひ、このサブロクの屋内リンクは作っていただきたいというのが、私の思い。

【加藤 文子 氏】

今回のスケートリンク施設の整備に関しては、最初の問題意識として、県内に公式大会を開催できる十分な大きさの屋内スケート場がないということだと思う。

そのような場がないと、スケートの競技人口や楽しむ人が減って、ますますスケートをする機会が減ってしまうという悪循環に陥ってしまうので、そうなる前に、施設を整備してスポーツ振興を目指すということが中心的なねらいになると思っている。

その上で、この施設を持続可能な形で運営していくためには、様々な工夫を凝らす必要がある。過度な公的負担は避けつつ、施設の維持存続が県民にも納得できるように、利用者を増やしていくことがやはり重要だと考える。

かつて、県内、山形市内にも屋内スケートリンクがあったわけだが、それがなくなっていることを考えると、スケートリンク単独では利用者の確保も難しいのが現状かと思う。

これから皆様といろいろ検討していくことになるが、個人的には、冬はスケートリンクとして、夏は別のアクティビティに利用といったことなども検討しながら、利用者の確保が見込みやすいものは何か、コストとの見合いも考え、利用者を拡大させていくためには、どのようなかたちが良いか、改めて検討しなければいけない。

特に山形市内に関しては、様々なアクティビティを行う屋内施設が不足しているという実感もあるので、こうした需要に応えることで、スケートリンクの維持存続につなげていくという工夫もあるのではないかと。

一方で、スケートリンクの整備がもたらす経済効果という観点からは、どれだけ利用者がいて、スケートリンクに来場することを契機として、どれだけ支出を増やすかということがポイントになってくるが、この点をあまり追求してしまうと、県外からお客さんを呼ぶ、お金を多く落とす仕組みを作るといったように、観光施設を作るコンセプトと同じになってしまう。

まずは、県内で、県民に対して、充実したアイススポーツができる場を提供するという最初の問題意識は忘れず検討していきたい。

【佐藤 裕恒 氏】

立場的に言えば、スポーツ施設があることは大変ありがたい。施設があることで、その競技が普及していくことは予想される。

今ゴールデンエイジという言葉がある。釧路に行ったときに、朝方マイナス20℃近くになる土地だが、公園に水を撒いて簡単にスケート場を作って、そこで練習をしていた。今オリンピックで活躍しているような選手は、幼少期、ゴールデンエイジからそういう環境で、物心ついた時にスケート靴を履くようなところで育った選手だと思う。

今回検討する屋内スケート施設があることで、やはり他県と本県の選手の登録者数をみると、スピードスケートについては、少ないがそこそこ、ただし、フィギュア、アイ

スホッケーについては他県と比較すると、施設が無いことと結びつけば、施設がないことで競技人口が伸びないということもあるのではないかとと思われる。

競技力を上げることは非常に難しい。指導者がいなくては、施設だけでは競技力を伸ばせない背景がある。今回この施設が整備の方向に向いていくということであれば、県をあげて、競技団体とも連携して、指導者の養成や、先ほどから出ている学校の授業での取組みなど、県の得意競技に育て上げるようなスタンスがないと、スケートの普及はなかなか厳しいものがあると感じる。

今後、まちづくりなどとも関連づけて、生涯スポーツや持続可能なものとするためには、やはり競技人口、親しむ人を増やすことが何よりも大事であると感じる。

県、競技団体とも連携して、フィギュア、アイスホッケー、スピードスケートを盛り上げていくといった機運がないと、なかなか前に進めないと感じたところ。

【山川 唯美 氏】

一県民、母親としての立場から、子どもがスケートをするかどうかといった視点で意見させていただきたい。

まず、私自身山形市で生まれ育って、これまで35年間、山形市に住んでいたが、以前ヒルズサンピアにあった屋内スケート場に、子どもの時に親に連れて行ってもらった記憶が未だにある。

今は屋内はないが、市のスポーツセンターに行けばスケートができるので、子どもを連れて行こうかという気持ちになり、家族連れが集中している。さらには、利用料が無料になる日があり、かなり楽しみにしている親子がいるということは、私たちのコミュニティの中でも話題になっている。

そのため、実際にこういった屋内スケート場が県内にできるということは、私たち世代からもかなり期待をしているという意見もコミュニティの方にいただいている。県内の母親たちの意見としては、基本的には皆さん必要だと思っているようだ。

また、県外から山形に移住をした母親たちからは、雪が降るのに屋内スケート施設が無いのかと思ったという意見も出ていたり、そういった意味では、せっかく冬に強い山形なので、スケートのようなスポーツを、子どもの時から育成していくことも必要ではないかと思っているところ。

とはいえ、現実的な主婦目線で考えると、先程説明いただいた新潟の利用料金が1500円、子ども1000円、未就学児が500円と聞いたが、この金額は、一般的な設定なんでしょうか。

市のスポーツセンターであれば利用料金が500円、靴代が300円で、大人は1000円以内で滑れるが、こういった基準で設定されているのでしょうか。

【アドバイザー】

新潟の利用料金はスケート靴も含まれた金額となっている。利用料金については、施設によって様々運営形態があるが、新潟の場合は平均よりも若干低い設定となっている。

【山川 唯美 氏】

ありがとうございます。どうしても道具がないとできないスポーツなので、一般の利用者をたくさん入れて、経営を回していく意味でも、料金設定には山形県民はシビアなところがあると思う。もう少し具体的な検討ができるようになった場合は、そういった目線でもお話できればと思っている。

【藤木 秀明 氏】

今後いろいろと詰めていくことになる、今日アドバイザーさんからいただいた資料④の運営の課題に記載されていることをきっちりと詰めていくところが課題であると思う。

【須藤 勇司 氏】

通年であると、冬場以外の一般のお客さんをどう確保するかということが一つ大きな課題になっていると感じた。

関係団体としてスポーツ少年団や総合型地域スポーツクラブがあるが、いろいろお話を聞くと、特に冬場、例えば陸上競技を中心にやっている団体は、除雪しながらなんとかやっている。冬場はなかなか活動しにくい。

様々な競技の種類はあるが、いずれにしても冬場、以前であれば、冬場の活動場所はスケート場があった。

今はスケート場がなくなったので、スキーもあるが、経済的なことを考えるとスキーはスケートに比べてお金がかかるといったことや、スキー場でお子さんを見ていることは非常に大変であり、親御さんもスキーをやる方も少なくなっており、スポーツ少年団でスキーに行くことは難しい。屋内のスケート施設があれば大いに活用したいという話も聞いている。

屋内スケート施設が整備されるのであれば、親御さんたちも、一緒に参加したり、活動しないまでも見ていられるような施設になってもらいたいという話も聞いている。

総合型地域スポーツクラブも、冬場の活動の仕方は屋内でできるものにほぼ限られる。屋外であれば、今は落合があるわけだが、別の屋内施設があれば、子どもから大人まで、例えば氷上でのゲーム大会といったようなイベントも組み込みながら、総合型地域スポーツクラブの活動も、今までよりもメニューを増やしてやっていけるのではといった、期待のお話も聞いている。

冬場に限らず、様々な活動団体が利用していくことで、通年型で、競技団体はもちろん、一般の方にも親しめるスポーツ施設になっていければよいと感じている。

最近、中学校部活動の地域移行といった話題も出ている。総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団が、中学生も含めた活動の場として新たに注目されているので、そういった面でも、屋内のスケート施設ができれば、活動の幅も広がってくるので、これまで以上に施設利用のパターンが広がると期待しているところ。

【山田 浩久 会長】

冒頭に、山形県は東北地方の中で唯一屋内スケート場がないというところから話がスタートしているが、それに加えて、1か所あったけれども、なくなってしまったという事実を踏まえて、これからの議論は進めていく必要があると思う。

屋内スケート施設があったものの維持することができなかったが、もう一度ここで、スケート施設を作る、今度はしっかりこれを持続させなければならない、というところが一番重要な課題と認識してこの会議に参加している。

テナントミックスという形があって、映画館はシネマコンプレックスという形で再興しているところがあることを踏まえると、昨今は、一つのスケート場で維持していくことはなかなか難しい時代なのではないかと思う。

他のスポーツ施設であるとか、さらには、他のレジャー施設のようなものとミックスして、相互の価値を高めていく必要があるのではないかと考えている。

時間がないので聞かないが、新潟の施設では、一体どのぐらいの範囲からお客を集めることができているのか。可能であれば資料としていただきたい。市の施設である以上、市内の利用者、商圈設定を市内で広げられているのかどうかといったところを検証して、可能であればデータをいただきたい。

いずれにしても、必要な施設であり、競技や子どもたちに夢を与える、もちろん障がい者に新しい活動の場を与えるなど、いろいろな意味で非常に重要な施設であると思うので、是非とも有意義な議論を行って、持続可能な新しい県のスポーツ施設を作っていければと思う。